

【論 文】

教会再建への多様な視線

—現代ロシアにおける民族復興と宗教再興の関連について—

櫻 間 瑛

1. はじめに

20世紀後半を彩った東西冷戦の終結は、歴史の終焉を意味するとされ、安定した世界が訪れることが予言された。しかし現実には、各地で様々な対立が表面化し、安定とは程遠い状態が現れている。C.ギアツは、脱植民地化以降、特に冷戦終結後の世界において、宗教的、民族的、言語的、人種的、さらには文化的なアイデンティティが、政治的に顕著な現象となっていることを指摘している（ギアツ 2007: 224）。こうしたアイデンティティの中でも、特に政治的な問題と関わりながら、先鋭的な対立を引き起こしているのが、民族と宗教に関わる問題である。

この民族と宗教の問題が、顕著な形で現れている地域の一つが、旧ソ連・東欧の旧社会主義圏である。社会主義時代には、マルクス主義に則って、宗教の存在を否定することが国家の基本イデオロギーとされていた。しかし、体制転換とともに、宗教に対する関心が顕在化し、また多民族国家をなしていた各国では、宗教の再生と民族復興が相互に関連しながら激しさを増していった。

近年の研究は、ソ連が民族を人々の基本的な分類範疇とし、各民族に共和国や自治共和国といった領域をあてがうとともに、社会主義のイデオロギーと矛盾しない範囲で、その言語や文化を保護していたことを明らかにしている（Martin 2001; 塩川 2004）。ソ連崩壊前後から活発化した民族復興の潮流も、基本的にこの枠組みを大きく逸脱しない中で進展している。

それと並行して宗教の再生も顕在化するようになったが、これは民族としての主張の活発化と密接に関連する形で進んでいる。N.ボゴミロヴァは、社会主義以降のロシアを含む中東欧における宗教復興の様子を概観し、一方では宗教が私的なこととして、その信仰の自由が保証されているものの、他方でこれが政治的なものとして、しばしば国家や民族といった集団アイデンティティと結びついていることを指摘している（Bogomilova 2004: 1）。連邦の宗教法では、ロシア正教会、イスラーム、チベット仏教、ユダヤ教がロシアにおける伝統宗教とされ、国家の公認と管理の対象となっている。そして、ロシア正教は連邦全体の事実上の国教として、国民統合に用いられ、イスラームやチベット仏教は、それを自分たちの伝統的な宗教とみなす各民族の文化や統合のシンボルとして用いられている（Garrard 2008; Balzer 2010）。しかし、こうした宗教の再生は常に統合に資するわけではなく、歴史的な背景なども絡まりながら、内部での排除や孤立を引き起こし、新たな対立や分裂の誘因ともなっている。

また、こうした宗教への関心の顕在化は、脱社会主義の文脈で初めて起こった現象ではあるが、完全にソ連時代の影響を払拭しているわけではない。ポスト・ソ連地域における宗教復興のあり方について、しばしば指摘されているのは、人々が自らの宗教的な所属を強く意識するようになってきているものの、それが直接宗教的な戒律や習慣を遵守することとは結びついていないということである。東シベリアをフィールドとする渡邊日日は、ポスト社会主義時代のロシアにおいて、「宗教が復興された」といった語りなどが頻発しているのは、あくまで「宗教について語り、宗教的施設を再建するというレベルに於いて（のみ）指摘できることであり、

当事者と宗教との関係が以前と比して根幹的に変容したとはいいいにくい」としている（渡邊 2010：414）。また、J.ジョンソンも、現在のロシアにおいて宗教的な信仰を持つこと（「神を信じる」と語る）と、実際の信仰実践の間にギャップが存在していることを指摘している。そして、こうしたギャップの原因の一つとして、宗教が民族的な自己認識の上昇に伴い、その文化や伝統を保存するのに資するものとして捉えられていることを挙げている。先述のとおり、ソ連期には宗教が抑圧を受ける一方、民族が基本的な範疇として実体化されたこともあり、この民族の枠組みを強化する限りにおいて、宗教に注目がなされているというのである。もっとも、ジョンソンも指摘するとおり、各民族や宗教の間でその復興のあり方には濃淡があり、それをより正しく理解するためには、現状の違いや歴史的なコンテキストも考慮する必要がある（Johnson 2005: 19-22）。

本稿では、ロシアの中でも突出した民族共和国の一つと言われるタタルスタン共和国をフィールドとし、その中のクリャシェンと呼ばれる集団を主な対象として具体的な検討を行う。タタルスタンの主要な民族となっているのは、伝統的にイスラームを信仰してきたとされるタタールである。クリャシェンとは、その中でロシア正教を受け入れた集団とされ、しばしば「受洗タタール」とも呼ばれている。しかし、この地域におけるロシアの支配と改宗政策との関係から、クリャシェンはタタールから「裏切り者」といった呼ばれ方もされており、そのためにあえて自分たちをタタールとは異なる民族と名乗る動きも見られる。ここでは、近年のクリャシェンの間の教会の再建の動きと、復興運動におけるその扱いを中心に上げながら、民族を名乗る運動の中で、宗教＝ロシア正教がどのような位置を占めているのか、それが実践にどのように反映しているのかをミクロな視点から論じる。

本論文は、筆者が2008年9月から2010年10月、2011年7月に行った現地調査に拠っている。この期間、筆者はタタルスタン共和国のカザン市及び、クリャシェンの居住する村落に滞在して、図書館・文書館での資料収集と、参与観察及びインタビューなどの現地調査を行った²。

以下、まずはフィールドとなるタタルスタン共和国について、その民族政策や民族関係を中心に置きつつ概説し、その文脈の中でのクリャシェンの歴史と現在の運動について、簡単に述べる。続いて、近年の教会の再建の様子を述べて、それを中心に展開している司祭らによる宣教活動をまとめる。その後、近年のクリャシェン復興運動の中で、教会が果たしている役割、及び運動と教会の活動の間の両義的な関係を示す。これらを踏まえて、現在のクリャシェンの復興運動の中で、ロシア正教が占めている位置を明らかにする。

2. フィールドと研究対象

2-1. タタルスタン共和国とタタール復興

本稿のフィールドとなるのは、ロシア連邦内のタタルスタン共和国である。この共和国は、モスクワから東に約800キロメートルの位置にあり、ヨーロッパ最大の河川ヴォルガ河とカマ河の合流する地点を中心に広がっている。共和国の首都はカザン市で、かつてはモンゴル帝国から派生したカザン・ハン国の首都であったが、16世紀半ばにロシア帝国に占領されて以降は、帝国の東方への拡張の中心地としての役割を果たした。

この地域では、古代から様々な王朝の交代が続いたが、9世紀のブルガール国家以降、一貫してイスラームが公式な宗教として受け入れられてきた。しかし、ロシア帝国がこの地を支配すると、統治政策の一環として、ロシア正教への改宗政策が進められていった。もっとも、イスラームもその影響力を減ずることはなく、ロシア正教会・ロシア政府は帝政期を通じてその

対応に苦慮し、時代とともに方針を変えていった。

ソ連期には、カザンを中心とする地域は、タタール自治共和国として、タタールの名を冠したロシア連邦共和国内の自治共和国となった。その内部ではある程度のタタール語使用、教育が見られたほか、特に歌謡や衣装などの民俗要素を強調したアンサンブル組織の設立を通じて、特に物質面での民族文化の保護が行われた。しかし、第2次世界大戦以降、都市化の進展などに伴い、徐々にタタールを含む非ロシア人の中でロシア語使用が広まり、生活スタイルなどでもロシア化が進展した。また、マルクス主義の教義に則り、無神論が標榜され、村落部などで密かに祈祷などが行われることはあったものの、人々の生活の中でロシア正教やイスラームが持つ意味は低下していった。

しかし、ペレストロイカを迎えると、ソ連全体で改めて民族文化を見直す動きが顕在化した。タタールもその例外ではなく、歴史家や作家といった人文系の知識人を中心にして、タタール語／タタール文化の復権、歴史の見直しを求める声が高まった。さらに、タタール自治共和国の連邦構成共和国への地位向上、あるいは独立を求める声までも上がるようになった。これに対して共和国指導部は、やはり連邦の中での自らの地位の向上を図りつつ、より穏健な民族主義的な主張を取り入れるようになった。新たにロシア連邦が成立すると、あくまでその連邦内部に留まりつつ、主権共和国としてのタタルスタンの名乗り、他に先駆けて大きな自治を獲得することに成功した。その共和国憲法では、国家語としてタタール語とロシア語の併用を謳い、共和国大統領に両言語の能力を課した。また、初等教育でタタール語の学習を義務化するなど、特に言語に重きを置きつつ、民族主義的な政策もある程度採用した。さらに、全世界タタールコンGRESSという官製の民族組織を作り、世界中のタタールを統合する組織として、5年に一度、カザンに世界の各地からの代表を招いて総会を開催している (Kondrashov 2000)。

こうした潮流と並行して、宗教復興も目立つようになった。特にタタールの間では、ムスリムとしての意識が強まり、過激な勢力の中には、イスラームこそタタール民族の要諦だと語る人々も現れるようになった。もっとも、この復興も内実は複雑であり、多くの人は自らがムスリムであるといいながらも、ソ連時代の習慣を継続して礼拝や断食といった実践には取り組まず、酒を飲んだり豚を食したりしている。特にソ連期に生まれ育った中年層がこうした態度を取っているのに対し、若い世代の中には、中東などのイスラームの姿を見ることで、より「正しい」イスラームを実践すべきと考える人も現れ、スカーフを頭にかぶった女性なども目立つようになり、親世代を困惑させている。共和国政府は、伝統的にムスリムが中心をなしてきた地域として、トルコを始めとするイスラーム世界との結びつきを強調している。しかし、サウジ・アラビアやチェチェンのように、イスラームが過激化・政治化することに対しては、強い警戒感を抱いている。そして、タタールのあるべきイスラームのあり方として、19-20世紀初頭にかけて活躍したムスリム知識人 (ジャディード) の啓蒙活動を範にしつつ、近代／ヨーロッパ的な価値観を体現し、他の宗教への寛容／理解を示すものとして「ユーロ・イスラーム」を標榜している。カザンの中心にあるカザン・クレムリンでは、ロシア正教の聖堂とイスラームのモスクを並べることで、ここが両宗教を中心に、多宗教／多文化が平和裏に共存する地であることを喧伝している。タタルスタン初代大統領となった M.シャイミエフらは、「タタルスタン主義」を強調し、「タタール中心主義」ではないことを強調している。

実際、現在のタタルスタンにおいて、多くの人は「他の民族とも仲良くやっている」など、概ね民族間の関係に肯定的な姿勢を示しており、目立った衝突などは見られない。しかし、村落部などでは、ムスリム＝タタールの居住地に優先的にインフラ整備がなされているといった

声も聞かれる。また、社会学的調査では、タタールの方が出世しやすいとされているという結果が出されるなど、タタールが優位な位置にあるという意見もしばしば聞かれる。実際、タタルスタンの共和国首脳は、2言語要求の影響もあり、そのほとんどをタタールが占めている。

また、タタール語教育が共和国内の全生徒に義務化されていることについて、不満の声も上がっている。すなわち、ロシア語教育に割く時間が減り、結果的に大学受験などで不利になるという声がロシア人のみならず、都市に居住するタタールの間からも出るようになってきているのである。また、学校教材として作成された『タタルスタンの歴史』の中では、帝政期の支配、特に改宗政策に対して強い批判的な記述が見られ、連邦中央から民族間の調和を乱しかねないという懸念も起きている。

一方で、現在でもロシア人はもとより、都市部においてはタタール自身も多くはタタール語を自由には使えないなど、ロシア語が実状として圧倒的に有利な位置にあることに対し、タタールの間から「タタールの故地であるのに恥ずかしい」といった声も出ている。

このように、現在のタタルスタンはムスリム＝タタールを基調としつつ、その内部に様々な民族・宗教の共存を許容する、近代的な価値観を身につけた共和国という自己規定を行っている。しかし、それは容易に達成されるものではなく、それぞれの持つ理想の違い、それに伴う現実とのギャップから、様々なひずみも生じている。それを体現している存在がクリャシェンである。

2-2. クリャシェンの歴史と現在

クリャシェンとは、しばしば「受洗タタール」とも呼ばれ、タタールの中で帝政期の改宗政策によりロシア正教を受け入れた人々の子孫とされている。帝政期の改宗政策は、カザン征服直後に行われたものと、18世紀前半に行われたものに分けられ、前者の結果ロシア正教徒となった人々は「旧受洗者」、後者の結果ロシア正教徒となった人々は「新受洗者」と呼ばれていた。旧受洗者は、イスラームが十分に浸透せず、土着の信仰なども色濃く残っている中、ロシア正教徒となった人々と言われる。一部の上流階級はそのままロシア政府内での貴族の地位を与えられ、ロシア人化していった。もともと、免税などの一定の特権を受けながら、多くは農村部に残り、またムスリムとはある程度隔離されて、イスラームの影響から遠い中で生活していた。それにより、ロシア正教の影響も受けつつ、この土地固有の習慣などを保持したといわれる。一方、18世紀に行なわれた改宗政策は、モスクの厳しい建築制限なども伴いつつ強硬な形で行われ、すでにイスラーム的な生活習慣などに馴染み、ムスリムとしての意識を強めつつあった住民の反発を買った。また、この結果の改宗は表面的なものに過ぎず、新受洗者は改宗以前と同じく、ムスリムとしての生活様式を保っていたと言われていた。19世紀になると、この新受洗者の間からイスラームへ戻りたいという請願が相次ぐようになり、大量棄教という現象が帝国当局、ロシア正教会の頭を悩ますようになった。

そこで新しい宣教の様式を整えたのが N.イリミンスキーである。彼は、現地の言葉を身につけ、人々と交わる中で、現地人が十分に理解できないまま祈祷などが行われていることが、宣教の障害になっていると考えた。そこで、各種の聖典を現地語に翻訳し、それをを用いて正教啓蒙活動を行うことで、改宗現地人をよりロシア正教に強く引き込むことを意図した。特に、この翻訳に際しては、クリャシェンが日常で話している口語に忠実にすることで、より信徒が理解しやすく、親しみやすくなるように配慮した。さらに文字についても、ムスリムが用いているアラビア文字ではなく、ロシア人と同じキリル文字を基調にすることで、ムスリム・タタールとの差異化をより明確にした。この試みは一定の成功を見、旧受洗者を中心に、ムスリム

の影響力から引き離し、ロシア正教徒にとどまらせることに成功した。同時に、この活動は、現地諸民族の間に読み書きをできる知識人層の形成を促すことともなった (Geraci 2001 ; Werth 2002)。

特に 20 世紀になると、旧受洗者の中から、自らをタタールとは異なる集団として、「クリャシェン」を名乗る人々が現れるようになった。そして、ロシア革命前後に各地で少数民族による自治獲得運動が活発になると、クリャシェンもその列に加わった。革命後には、ボリシェヴィキ政府が民族自決の原則に配慮して、多様な民族の存在を公認し、自治を与える中で、クリャシェンも独立した民族として扱われ、特に出版活動や教育についての文化的な自治を獲得した。しかし、すぐにソ連内で「諸民族の接近と融合」が目指され、また無神論を徹底する活動が展開されるようになると、クリャシェンも単に宗教的な特徴を持つに過ぎないものとして、タタール内部の一集団とみなされるようになった (Werth 2000)。

結果、ソ連期を通じて、クリャシェンの存在が前面に出てくることはなくなったが、完全にタタールと一体化したわけではなく、土着の信仰とロシア正教に由来する様々な習慣などは保存されており、民俗学などの研究対象とされていた。実際、その生活様式などはタタール以外の周辺民族との類似性も強いと言われている (Mukhametshin 1977)。他方、都市に出たクリャシェンは、ロシア語話者となり、名実ともにロシア人化した人も多かったと推測される。

ペレストロイカを迎え、タタールの間に民族復興の潮流が起きると、クリャシェン出自の作家やジャーナリストのような知識人の中からそれと並んで、自らの文化の復興を目指す運動を展開する人々が現れた。当初はタタールの民族組織の内部で活動を進めようとしたものの、タタールの民族運動の中で、イスラームの重要性が強調されるようになると、徐々にクリャシェンはその中で居場所を失っていった。特にイスラームがタタールの精神文化の要諦であり、帝政期の改宗政策を、それへの侵略とする歴史観が広がると、その結果生まれた集団とされるクリャシェンは孤立の度合いを深めていった。クリャシェン出自の作家として、初期のクリャシェンの活動の中心人物であった M. グルホフは、ソ連末期のタタール民族組織の会議の中で、クリャシェンをタタールの運動から放逐しようという動きがあることを憤慨を込めて語っている (Chetvertaia 2009: 123-124)。実際、著名なタタール文芸誌に、「クリャシェンは誇るべきか？ 恥じるべきか？」という題で、クリャシェンが帝政期からロシアの支配に加担してきたと難詰する論考が発表されることもあった (Baltach 1994: 61-64)。さらに、タタールはムスリムであることが正しいこととして、一部からクリャシェンがイスラームに「戻る」べきという声もあがるようになり、自分たちがタタールの中の「間違っただけのもの」という眼差しを受けることともなった。実際の生活においても、クリャシェンが多数居住している郡などでも、その首長はムスリム・タタールが占めている、といった不満も出ている。こうした状況から、クリャシェンの知識人たちはタタールとは袂を分かち、独立した民族としての地位と権利を求め、民族文化センターを立ち上げた。そして、新聞を設立して自らの存在をアピールし、その要求を表明するとともに、直接共和国や連邦政府に対しても、その民族としての権利の保障を求めようになった。

こうしたクリャシェンの活動が、最も論争を呼ぶ機会になったのは、国勢調査であった。ソ連時代より、国勢調査においては各人の民族を尋ねる欄が置かれ、国内の様々な民族の存在を確認する機会となっていた。クリャシェンも 1926 年の最初の国勢調査では、民族として認定されたが、その後の調査では、クリャシェンはタタールの一部として、調査結果に現れることはなくなった。2002 年に行われたロシア連邦として最初の国勢調査を前にして、クリャシェ

ンをいかにして扱うかが大きな論争となった。タタルスタンの指導部やタタールの研究者などは、タタールの統一を掲げ、クリャシエンの運動を宗教的分離主義という言葉なども使いながら非難した。対して、クリャシエンの活動家らは、クリャシエンの祖先が帝政期の改宗政策以前にキリスト教を受け入れたとし、タタールとはその頃からたもとを分かっていたこと、そのためイスラーム化されていないこの地方に土着かつ独自の文化を持っていると主張して、独自の民族とする根拠としている。そして、自分たちの起源は、ロシアの改宗政策によるものではなく、また自分たちが単に宗教によってのみ特徴づけられるわけではないことを強調している。この国勢調査の結果では、クリャシエンは民族 (natsional'nost') としてのタタール内部のエスニック・グループ (etnicheskaia gruppy) とされ、連邦全体で約 2 万 5000 人、タタルスタン共和国内で約 1 万 8000 人が記録された。これに対し、クリャシエンの民族組織関係者は、タタール内部という位置づけに不満を表明し、人数についても、20 万～30 万人存在するはずであり、相当数のタタールへの書き換えがあったと訴えた (櫻間 2009)。

また、この運動の中で求められている権利の内容を見ると、共和国の公認を受けたクリャシエン民族アンサンブルの設立、民族博物館の設置、科学アカデミー内のクリャシエン研究部門の設置などであった。こうした民族文化の表象のあり方は、ソ連期に体系化されたものであり、現在のクリャシエンの運動も、そうした表象の権利を有した存在として自らを再定義する運動と考えられる。しかし、その中で取扱いが困難なのが宗教の問題である。無神論を標榜したソ連においては、宗教は否定すべき対象であり、文化のあるべき姿からは取り除かれるべきものであった。クリャシエンの運動の中心をなす人々も、ソ連期に教育を受けたことで、そうした考え方に親しんでいる。しかし、クリャシエンを語る上で、ロシア正教との関わりを無視することはできない。また、この運動に関わる行事などには、しばしばロシア正教の司祭なども参加している。以下では、近年の教会復興を概観し、それとクリャシエン復興運動がいかなる関係にあるのかを議論する。

3. クリャシエンと教会復興

3-1. クリャシエンの教会再建

帝政末期には、イリミンスキーの宣教活動の結果、クリャシエン語³での祈禱を行なっている修道院が 2 つ、教会は 50 以上に上ったと言われている (Pavel 2001: 132)。しかし、ロシア革命以降、ボリシェヴィキによって無神論が標榜され、宗教組織への攻撃が強まると、これらの修道院や教会も、すべて姿を消すことになった。

ペレストロイカを迎えると、ロシア全体で宗教への関心が高まり、タタルスタンもその例に漏れず、ロシア正教の教会やモスクの再建が相次いだ⁴。そして、この潮流に合わせるように、クリャシエンの間でも自分たちのかつての教会などを復興させようという動きが現れてきた。1988 年、クリャシエン出自の聖職者パヴェルにより、カザンのボクロフ教会でクリャシエン語の祈禱が行われた。翌 1989 年には後にカザン及びタタルスタン府主教となるアナスターシーが提案する形で、パヴェルを中心に、カザン中心部のペテロ・パウロ聖堂でクリャシエン教区⁵が組織され、ここで定期的にクリャシエン語の祈禱が行われることとなった。カザン以外では、タタルスタン共和国北部のチュラ村とカマ河沿いのボリシエ・アティ村で、村民や地元企業の支援により教会の再建がなされ、やはりクリャシエン語で祈禱が行われている。また、パヴェルらクリャシエン出自の司祭は、クリャシエンが居住している村落などを回ってクリャシエン語での祈禱を行い、宣教活動に従事している。

1997年には、カザン市内のティフヴィン教会がクリャシエン教区の拠点として移譲されることとなった。パヴェルは教会の横に住居を構えつつ祈祷を行い、また教会の施設は、クリャシエン民族組織による行事などを行う拠点ともなった。このティフヴィン教会自体は、17世紀に建立されたもので、帝政期の旧タートル居住区に位置しているものの、元々クリャシエンが祈祷を行っていたものではない。1930年代初頭までは教会として機能していたが、ソ連当局によって接収され、病院や寮として使用されていた。その間に老朽化が進み、移譲された時点では、大規模な修復が必要であった。パヴェルやカザン在住のクリャシエン信徒は、私財などを提供するほか、自ら修復工事に従事して復興に努めた。筆者が主に調査を行った2008年末から2009年にかけても、断続的に工事は進められ、一般信徒が自ら工具を手に作業している姿が見られた。この教会は、タタルスタン共和国におけるクリャシエンの宗教的な中心とみなされ、その存在を象徴する施設となっている。

その後も、各地のクリャシエン村落で、徐々に教会の再建・新築が進んでいった。これは地元企業や村人自身の寄付に支えられる形で行われている。また、建築に村民自身が携わることで協力している例も珍しくない⁶。こうした動きは、特に2000年代後半から顕著になり、2013年2月現在、タタルスタン共和国内ではティフヴィン教会はじめ、5つの教会で定期的にクリャシエン語での祈祷が行われている。さらに3つのクリャシエン村落では、教会が建てられて定期的な祈祷が行われているが、用いられている言語は、ロシア人が居住している場所と同じく教会スラヴ語である。そのほかに、11の村落では教会の再建こそなかったものの、聖職者が常駐しているわけではなく、不定期にのみクリャシエン語での祈祷が行われている。

このように教会の建物自体の復興は進んでいるものの、目下の問題として、クリャシエン語での祈祷が可能な司祭が不足していることがしばしば指摘されている。もっとも、パヴェルの語るところでは、現在10人以上のクリャシエン出自の若者が神学校で聖職者となるための教育を受けており、状況の改善が期待されている⁷。

3-2. 教会での宗教活動と正教宣教

これらの教会における宗教的な活動で重要なのが、カトリックでのミサに相当する奉神礼である。奉神礼を行う日程は、日曜日と正教会の祝日を必須のものとし、その他の曜日での実施の有無は、各教会で定められている。

ティフヴィン教会では、月曜日の夕方と火曜日の朝に、他のロシア正教の教会と同じ教会スラヴ語での祈祷が行われている。そして、金曜日の夕方、土曜日の朝と夕方、日曜日の朝にクリャシエン語での祈祷が行われている。また、復活大祭（Paskha：カトリックのイースターに相当）や降誕祭（Rozhdestvo：カトリックのクリスマスに相当）といった、ロシア正教における祝日の際には、それぞれで定められている時間に、クリャシエン語での奉神礼が執り行われている。いずれの司式も担当しているのはパヴェル長司祭である。教会内で灯すろうそくの販売や、その片付けといった補佐的な作業は、高齢の女性を中心とした、教会にいつも通っている人びとが行っている。

月曜日と火曜日の奉神礼に参加しているのはロシア人が主であり、クリャシエンはごく一部の熱心な信者が来ているだけである。総数としても、それほど多くの人が集まるわけではなく、筆者の見限り、10~20人程度の参加者数であり、そのほとんどは高齢の女性であった。

一方、週末のクリャシエン語での祈祷の際には、多くのクリャシエン信徒を目にすることができる。金曜日と土曜日の奉神礼は、月曜日・火曜日と同じく、高齢の女性を中心に10~20人程度の参列者にとどまっている。これに対し、日曜の奉神礼では、男性や若者も含め40~50

人程度の参列者がある。しかし、その祈祷への参加の様子を見ると、おざなりな面も目立ち、本来立って臨まなければならないのに、ベンチで座っている若者の姿や、おしゃべりに興じている姿も目立つ。

さらに多くの参加者を集めるのがキリスト教の祝日に行われる奉神礼である。特に、復活大祭や降誕祭といった、大きな祝日の際には、教会からあふれるほど多くの人が押しかけてくる。ただし、やはりその参加者の多くは、それほど真面目に祈祷に参加しているという印象を与えない。大方の来訪者は、後方に陣取って頻繁に出入りを繰り返したり、おしゃべりをしたりしている。ティフヴィン教会の場合、これらの祭日に行われる奉神礼もクリャシェン語で行われるが、来訪者の中には多くロシア人の姿も見ることができる。

村落部においても、基本的に同じような奉神礼の様子を確認することができる。筆者がまとまった現地調査を行なった村落のうち、教会が機能していたのはカザンから約 80 キロ東に位置しているクリャシュ・セルダ村である。村の人口は約 500 人で、ほぼ全員がクリャシェンとみなせる。帝政期にも教会はなく、隣の村にあった教会に通っていたとされるが、その教会の活動もソ連期に停止した。そうした中、2006 年に村出身の実業家が資金を出す形で、村内に木造の新しい教会が建設された。この教会には、別の郡出身ながら、クリャシェン出自であるディミートリーが司祭として派遣され、現在弟とともにこの教会に起居しながら、日頃の祈祷などを行っている。

この教会では、日曜日の朝とキリスト教の祭日にのみ奉神礼を行っており、祈祷言語は常にクリャシェン語である。日曜日の日常の奉神礼では、わずか 10 人程度が参加しているに過ぎず、小さな祭日も、その数はほとんど変わらない。もっとも、降誕祭などの大きな祭になると、ここでも多くの参列者を集めている。特に、この周辺にはクリャシェンの居住している村が集中しており、その中で教会が機能しているのはこの村だけのため、他村からも多くの人々がやって来る。しかし、ここでも人々の祈祷自体に対する関心は、それほど強いようには見えず、祈祷の間に入出入りする人やおしゃべりをする人も多い。また、そもそも教会での決まりを分かっていない人も散見され、頭を覆っていない女性や、十字を左から描いたために、司祭にたしなめられる若者の姿も見られた⁸。

個々に話を聞くと、多くの方は「自分は正教徒と考えている」といい、「人に宗教は必要だ」と語る。しかし、ここで見たように、それは必ずしも具体的な信仰実践にはつながっておらず、その理由については「慣れていないから」といった風に説明されている。そこで、司祭らは人々に信仰とそれに基づいた生活を根付かせるべく、宣教活動に勤しんでいる。まず教会では、日曜の礼拝の後に子供を対象にした日曜学校を行っている。そこでは司祭が教師となつて、子供たちに聖書に則った歴史などが教えている。これは、幼少期から聖書などに親しむことによって、後々キリスト教徒としての自己を意識するとともに、より教会を身近に感じる素地にするためのものといえる。

さらに力が入れているのが、聖典の翻訳活動である。ティフヴィン教会の拠点化とともに、聖典のクリャシェン語への翻訳のためのグループが創設された。そして、サンクト・ペテルブルグのロシア聖書協会⁹の協力も得て、パヴェルを中心にイリミンスキーが採用した語彙と、開発した文字を用いて、翻訳が進められている。その最初の成果として、2000 年に『共同書簡』の翻訳版が出版され、2005 年には『新約聖書』の翻訳が完成し、初版で 1000 部が印刷、出版された。2009 年から 2010 年にかけては、『あの世について』や『子どものための聖書』といった、小さなより一般向けのリーフレットが作成され、教会内で廉価で販売されてい

る。また、2012年には『新約聖書』の翻訳第2版も出版されている。こうした活動の模範は、19世紀のイリミンスキーによる活動であり、カザンのパヴェルも、クリヤシュ・セルダ村のディミートリーも、自室に大きなイリミンスキーの肖像画を掲げ、尊敬の念を示している。

タタルスタンの主教区としてもこの翻訳活動を支持し、推奨している。2011年7月には、イリミンスキーを補佐し、最初のクリヤシェン出自の聖職者となったV.ティモフェエフの生誕175周年を記念して、ティフヴィン教会で大規模な祈祷が挙げられ、当時のカザン及びタタルスタン主教区の大主教アナスターシーと共和国中のクリヤシェン出自の聖職者が集まった。また、2012年の5月には、カザン神学校でイリミンスキーの功績をたたえて、学術会議「N.I.イリミンスキー：ロシアの諸民族の啓蒙者」が開催され、パヴェルの長年にわたる翻訳活動への表彰も行われた。また、最近ではディミートリーがクリヤシェンへ向けた宣教の為のインターネット・サイトを立ち上げ、ロシア正教の教義などについての知識を広めるほか、クリヤシェン語での祈祷を行っている教会の紹介などが行っている¹⁰。

このように、近年は教会を中心として、ロシア正教の宣教活動が展開されている。同時に、その担い手である司祭たちの中には、クリヤシェンの民族復興運動に参加している人物もいる。クリヤシェンの民族組織が行う様々な行事には、しばしばパヴェル長司祭らが参加して、祝福の言葉を述べている。また、クリヤシェン民族運動の主要な広報媒体となっている『同胞』紙では、ディミートリー司祭が、定期的に読者からの信仰に関わる質問に答えるコーナーが設けられている。しかし、クリヤシェンの運動に中心的に関わっている人々、及びその活動の中でのロシア正教及びそれを体現しているはずの教会の位置づけは両義的である。

4. クリヤシェンの復興運動とロシア正教

4-1. 復興運動の中の教会の役割

パヴェル長司祭は、クリヤシェンにとってロシア正教は重要な要素であるとし、教会にクリヤシェンの文化が保存されているという。クリヤシェンの復興運動の中でも、これに関わる要求は提出されている。1992年に行われた全世界タタールコンGRESS大会に、クリヤシェン組織の代表として出席したA.フォーキンは、組織の目指すものの一つとして「正教教会とクリヤシェンの母語での祈祷の復興」を挙げている（Vsemirnyi 1992: 88）。さらに、2001年に行われ、タタルスタン内外から様々な出席者を集めて行われたシンポジウムの決議でも、クリヤシェンの集住地におけるクリヤシェン宗教共同体の結成と教会の再建の必要性が訴えられた（REZOLIUTSIIA 2001: 186）。最近では、筆者も参加した2010年に行われたクリヤシェン民族組織主催の青年フォーラムにおいて、その決議でクリヤシェンの精神面におけるロシア正教の重要性が明記されたほか、プログラムの一環として行われたクリヤシェン村落訪問ツアーの中で、クリヤシュ・セルダ村の教会での、クリヤシェン語での祈祷の見学が組み込まれた。

このように、クリヤシェンの復興運動の中で、ロシア正教、特にその教会について言及している場面は確認される。そして、その精神的な役割についても関心は見られるが、それ以上に重視していると思われるのは、教会内での言語の問題である。

イリミンスキーの宣教活動により、クリヤシェンに独自の言語体系とそれを支える文字体系が整えられた。革命前後には、それを用いた教育活動や出版・芸術活動が行われたものの、タタールとの「融合」が進められることで、それらは消滅した。現在では、村落部においても標準タタール語の教育が行われ、メディアにおいて用いられるのもロシア語か標準タタール語である。その中で、クリヤシェンの言語の独自性を唯一公に保存できているのが教会とその中

での活動である。

そもそも、クリヤシエンの教会といっても、基本的な教義や実践において、他のロシア正教の教会と異なる点はない。その中で唯一の独自性として挙げられるのが、クリヤシエン語で祈祷を行う点である。そして、まさにこの言語使用が、教会を、クリヤシエンの集うセンターとして機能させる要因となっている。筆者の聞き取りでも、わざわざティフヴィン教会の祈祷に参加する理由として、「ここがクリヤシエン語での祈祷をしているから」という回答が多く見られる。特に、高齢の人の場合、カザンに住んでいて十分ロシア語がわかるとしても、やはり母語の方が理解が容易だという人は珍しくない。また、「母語で読まれると、心でわかることができる」という人もいる。ティフヴィン教会の場合、カザン外の郡などに居住していても、クリヤシエンとしてわざわざここで洗礼を受けたり、結婚の儀礼を挙げたりする人々もいる。同様のことは、村に位置している教会にも当てはまり、周囲のクリヤシエンを集める機能を有している。このように、ティフヴィン教会を始めとするクリヤシエンの教会は、宗教的な場所であると同時に、クリヤシエンの存在を誇示し、実際に人々が集まる場所としての機能を有している。これらの面を捉えて、クリヤシエン民族教会の関係者らも「クリヤシエンの統合のために教会は必要である」と語っている。

4-2. クリヤシエン復興運動とロシア正教会の葛藤

では、クリヤシエンの文化復興運動が、宗教復興と即座に一致するものと考えられているかという点、必ずしもそうではない。先に指摘したように、クリヤシエンが自らの独自性を主張する際に、自分たちが単に宗教＝ロシア正教のみによって定義づけられる集団ではない、ということが強調されている。

まずクリヤシエンの運動の中で強調されるのは、ロシア正教へ改宗したタタールと自分たちを区分することである。近年、モスクワを拠点に、ムスリム・タタールの家系に生まれながら、ロシア正教に改宗した人々がクリヤシエンを名乗りながら、タタール語の祈祷を行う教会を作って、積極的な宣教活動を行なっている。しかし、タタルスタンのクリヤシエン運動の関係者の多くは、この人々をあくまでタタールとみなし、自分たちとは異なる存在と位置づけている。そもそも、こうした動き自体、例外的なものであり、ロシア正教に改宗したタタールでも、それをもって自らをクリヤシエンとみなす人はほとんどいない。筆者が教会で聞き取りをしている中でも、ムスリムからロシア正教徒に改宗したタタールの男性に出会ったが、彼は自らをあくまでタタールであるとし、クリヤシエンは「異なる民族」と説明した。

また、そもそもクリヤシエンの民族運動の中心を担っている人々は、宗教、特にその実践に対して必ずしも熱心な姿勢を示しているわけではない。現在の運動の担い手は、ソ連時代に教育を受けた作家やジャーナリスト、研究者である。彼らは、無神論教育の影響下で育ち、洗礼も最近になって受けたか、あるいは今でも受けていないという人も珍しくない。筆者が教会での調査を行っている間も、大きな祝日でもない限り、民族運動関係者が奉神札などに来ている姿を見ることはほとんどなかった。教会で行事があって出席する際も、肝心の祈祷などに真面目に取り組むことはない。

クリヤシエンが多数居住していることで知られるママディシュ郡のクリヤシエン民族組織の代表であるステパンもその中の一人である。彼は、2012年現在40代半ばで、歴史教師として働いた後、郡の教育部長となった。それと並行して、クリヤシエンの民族文化復興運動にも積極的に参加しており、この郡で行われている、クリヤシエンの民族的な祭りや位置付けられているピトラウの実施においても中心的な役割を果たしている。彼の妻はムスリムであり、筆者

が会った2010年時点で20歳前後であった2人の娘にも洗礼はさせていなかった。いずれ、民族を何にするのかも含めて、自分で決めさせるとしている。

この娘に「お父さんは洗礼しないのか?」と聞かれた際、ステパンは「その方がいいのであればする」と答えこそしたものの、当面する必要は感じていないようである。また、妻との会話の中では「今は宗教的 (religioznyi) かもしれないが、精神 (dukhovnost') が無い。昔 (= ソ連時代) は、宗教性はなかったが、展望 (perspektiva) があった」として、ソ連時代を回顧しつつ、現在の人々がにわかに宗教への関心を表明していることに批判的な目を向けている。もっとも、彼自身、潜在的に自分がロシア正教徒であることを意識していないわけではない。彼の妻の語るところでは、家を新築した際、妻がムッラー (イスラームの聖職者) を呼んで聖別してもらったのを見て、ステパンも司祭を呼んで聖別してもらったという。また、郡内のクリャシェン村落で新たに教会建設をした際には、郡の民族組織代表として、そのプロジェクトの実務面での中心的な役割を担うなど、一定程度クリャシェンとロシア正教の結びつきも意識している。しかし、ロシア正教会という組織については、それが特に権力と結びついているとして、批判的な意見も述べている。

さらに、クリャシェンの文化復興運動の実践を見ると、正教会の推進する動きと相反するものも見られる。クリャシェンの村落では、キリスト教受容以前の古代の文化や信仰実践が残っていると指摘されている (Mukhametshin 1977: 8)。帝政期には、宣教師らにより、特に供儀を伴った儀礼について正教への帰依を妨げるものとして、批判的な目が向けられていた (Mashanov 1875: 24)。しかし、筆者の見限り、こうした儀礼はソ連期においても完全に根絶されたわけではなく、一部ではロシア正教と一体化しながら、人々にロシア正教徒としての自覚を維持させる機能も担っていたと思われる。だが、近年の司祭らは改めて正教啓蒙活動を行うようになり、これら儀礼に対して批判的な意見を表明するようになってきている。そして、実際にこうした司祭らの働きかけによって、こうした習慣をやめる村落も出てきている。しかし、クリャシェンの文化復興運動の中では、逆にこうした習慣を、自分たちにとっての伝統であり、民族文化の重要な要素として積極的に復興させようという動きも見られるのである。

さらに、元来ロシア正教と関連していたはずの行事について、あえて宗教的な側面を捨象しようという動きも見られる。ステパンが積極的に関わっているピトラウという祭りは、ロシア正教における聖使徒ペテロ・パウロ祭に合わせた日程となっているが、現在民族復興活動の一環として行われている祭りの中では、むしろこの宗教的な側面は極力捨象し、民族文化という側面を前面に押し出している様子が確認できる。別の祭り関係者に話を聞いても「ロシア正教が関係するのは、午前中のお祈りなど。この祭りは、その後で、キリスト教以前の習慣などに則ったものに基づいている」として、この祭りを説明している。

これは、ロシア正教とは別の自分たちの文化・伝統があることを強調するものとなっている。と同時に、こうした祭りなどの中の宗教性を剝奪しつつ、民俗的な側面を強調する表象のあり方は、ソ連期に定式化された方式をそのままなぞっただけ¹¹。これは、彼らが目指すものが、まさにソ連的な民族としてのステータスの獲得にあることの反映といえる。そして、土着の儀礼などに由来するとされる民俗的な側面こそ、自分達が独立した民族であることを正当化するものと考えているのである。これに対して、司祭や信仰心の強い人々の中からは、ロシア正教に則った祈祷などにも熱心に通うべきであるという声も挙がっている。ここには、「クリャシェン」としてあるべき姿の考えについての意見の相違も反映していると考えられる。

結

ソ連の崩壊に伴う体制転換は、社会の再編成を進めるとともに、人々の自己認識のあり方にも変容をもたらした。中でも顕著であったのが、民族に対する関心の上昇と、宗教の再生である。独立を達成した諸共和国、及びその内部の民族自治共和国は、基幹民族の文化や伝統を強調するとともに、それと結びつくものと考えられている宗教を統合のシンボルとして用いている。しかし、それはしばしば内部の亀裂を白日の下に晒すものとなっている。

ロシア連邦の中でも、突出した民族共和国であるタタルスタン共和国においては、その基幹民族であるタタールの存在を強調し、その精神面の中心としてイスラームの復興にも力を入れている。同時に、その文化は近代的な価値観を体現し、他の文化との共存を達成するものであることが強調されている。しかし、この共存はタタール＝ムスリムであることを自明視し、かつそれが主流派であることを前提としている。そして、それは結果的にクリャシェンの存在を浮き上がらせることとなった。

クリャシェンは、ロシア正教を伝統的に信仰してきた集団として、タタール＝ムスリムという図式から逸脱している。そして、タタールの中でムスリムであることが正しいという規範の強まる中で、自分たちをタタールとは異なる民族と主張しつつ、その文化復興に力を入れている。その活動の内容を見てみると、クリャシェンとロシア正教会の間に両義的な関係のあることが見えてくる。

ソ連崩壊による宗教の再生の潮流の中で、クリャシェン語での祈祷が再開され、それを常時行うことのできる教会の建設も進んでいる。そして、ロシア正教会としても、かつてのイリミンスキーの活動を彷彿とさせる形で、クリャシェンへの正教宣教活動を推進している。すなわち、クリャシェンがロシア正教徒としての信仰を持ち、それに相応しい実践を行うことを求めて聖典の翻訳などを積極的に進めているのである。

クリャシェンの復興運動においても、ある程度、こうした正教宣教活動との関わりは見られる。イリミンスキーに対しては、その啓蒙活動の結果、クリャシェンから知識人が生み出され、クリャシェンの近代化を可能にした人物としての評価がなされている。そして、彼の考案した、クリャシェンの独自性を保証するものとしての言語が保存され、クリャシェンがそれとしておおっぴらに集いうる場所として、教会の建設などを歓迎する姿勢も示している。教会があることが、自分たちの存在を象徴するものともされているのである。しかし、その中で信仰実践を推進することについては、必ずしもこの運動の中で重視されているわけではない。すなわち、同じ教会再建に注目しているとしても、クリャシェンの復興運動とロシア正教会は、同床異夢の関係にあると言える。そしてここには、現在のクリャシェンにおける民族と宗教の結びつきの限界が現れている。

クリャシェンの復興運動の中で強調されているのは、あくまでクリャシェンが「(潜在的であるとしても)ロシア正教徒である」という水準である。そして、実際に個人が「ロシア正教を信仰し、それに従って実践する」ことについては、この運動の範疇には含まれていない。そもそもロシア正教に基づいた習慣や文化は、それがクリャシェンの文化や伝統の一部であることを認めつつも、全てであると考えられているわけでもない。場合によっては、ロシア正教会の教えと相反する習慣などを強調することもある。これは、あくまで強調されるのは民俗的な側面であり、宗教はそれを構成する様々な文化要素の一つとして捉えられていることを示している。

こうした関係には、まずソ連期に培われた民族を一義的な集団範疇とする考えとの継続性の

反映を指摘できる。そもそも、クリヤシェンの運動の中心人物たちの関心の焦点は、あくまで民族文化の再興にある。他方、宗教に関しては、ロシア正教徒ということ意識しはするものの、無神論の時代の経験を背景に、それを実践することには不慣れとなっている。また、クリヤシェンに独自の問題として、ロシア正教を一義的にすることは、タタールからの「裏切り者」といった視線を裏打ちすることになりかねず、同時にロシア人との差異化にも困難を抱えることとなる。また、徒にロシア正教徒であることを強調しつつ、差異化をすることは、結果的に宗教分離主義という印象を与え、ロシアやタタルスタンが標榜しているところの多宗教の平和・共存をかき乱す存在という印象を与えることにもなりかねない。

こうした現状は、民族が基本的な範疇としての有効性を持ち、宗教はそれと一面では結びつきながらも、不即不離の関係を結んでいることを示している。クリヤシェンが顕在化する過程は、宗教が民族の結束を強める面もあれば、分裂させる要因ともなりうることを示している。しかし、そこで生まれたクリヤシェンの活動を見ると、この宗教と民族の結び付きはあくまで表面的な水準であり、クリヤシェンであることを強調することと、信仰を持ったり、ロシア正教に基づいた実践を行ったりすることが直接結びついているわけではない。この事例は、旧ソ連・社会主義圏という、民族が強固に制度化された形で浸透し、同時に無神論が標榜されていたという文脈の中で、より顕著なものとなっている。もともと、こうした民族と宗教の関係は旧ソ連というフィールドに限定したものでもないように思われる。例えば、日本人という例をとっても、その大半は日頃、仏教や神道の戒律などを遵守しているわけではないものの、寺社仏閣は日本文化の重要な要素と認識され、漠然と日本人は仏教徒ないし神道に属するものと考えている。ここには、広く近代における世俗化の問題と関連させて論じる余地があるであろう。本論は、それを議論するうえでの、ひとつの題材としても位置づけることができよう。

[謝辞・付記]

本論文は、北海道民族学会 2012 年度第 1 回研究会（7 月 8 日）において行った報告「エスニック・シンボルとしての教会：現代ロシアにおける宗教と民族の交錯について」を基にしている。報告当日には、参加者の方々より有益なコメントを頂いた。また、本論文執筆の為の資料収集に当たっては、平和中島財団、北海道大学スラブ研究センター、松下幸之助記念財団から多大な支援を頂いた。また、投稿後には査読者の方より詳細なご指摘をいただき大変参考にさせていただいた。末筆ながら、合わせて感謝の意を示したい。

なお本論文は、筆者個人の考えに基づくものであり、大使館等いかなる組織・団体の意見を代表するものではない。

[注]

¹クリヤシェンとは、基本的にはタタルスタンにおけるタタールとの関係の中で浮かび上がってきた集団であり、その点で人類学的な分析概念で語れば、綾部恒雄が「国民国家の枠組のなかで、他の同種の集団との相互行為状況下でありながら、なお、固有の伝統文化と我々意識を共有している人々による集団」と定義しているエスニック・グループとすることができる（綾部 1993: 13）。しかし、旧ソ連圏においては、本文中でも触れるように、「民族 (natsional'ost')」や「エスニック・グループ (etnicheskaia grupp)」とは、基本的な人々の分類範疇とされ、それに基づいて文化的な権利を付与される単位として理解されていた。以下、本稿で民族というときは、この旧ソ連圏及びロシアで用いられているカテゴリーを指す。そして、このソ連的な観念を背景に、現在のクリヤシェン知識人が、自らをいかに表象し、そこに宗教がどう関係しているのかを論じていく。

²以下、本稿で挙げられる人名や地名は原則本名である。これは、ここで挙げる人々や村落が、インター

ネットなどで容易に探し出すことができるため、敢えて匿名にする必要がないと判断したためである。

³現在、クリヤシェンが独自性を持った集団であるかの議論の中で、その言語がタタール語と異なっているかどうかの一つの大きな争点となっている。しばしばクリヤシェンの話す言語には、よりアラビア語やペルシア語の影響が少なく、ロシア語の影響がより強いと言われている。クリヤシェンの中には、標準タタール語はアラビア語などが混じっていてわかりにくい、と強調する人もいるが、通常は問題なくコミュニケーションを取ることができる。言語学的にも、多少の語彙の差などがあるものの、明確な独自性は挙げづらく、またクリヤシェン内部での差異も大きいことから、その全てを含めてタタール語の方言とする位置づけが一般的である。さらに、学校での教育やマスメディアを通じて、現在のクリヤシェンとされる人びとが実際に話し、読み書きするものは他のタタールと明確に区分できるものではなくなっている。本論文では、クリヤシェンが日常的に用いている言語については「タタール語」とし、イリミンスキーが体系化したものに則り、教会での祈祷などで用いられている言語については「クリヤシェン語」と記載することとする。

⁴ソ連期には、共和国全体で機能しているモスクや教会の数はごくわずかであり、カザン市内ではそれぞれ一つずつしか機能していなかった。しかし、1990年代から急激にその数を増やし、現在共和国内で機能しているモスクの数は1000を超えと言われる、カザン及びタタルスタン府主教区で登録されている教会・修道院の数は、300を超えている。

⁵教区とは主教区の下に位置する単位で、信徒たちの共同体であり、聖職者を中心にして教会や礼拝堂といった施設をはじめとする、財産の管理などを行っている。ソ連期には政府の管理を受ける単位でもあった。

⁶筆者の調査フィールドの一つであるスタロ・グリーシュキノ村では、村の学校長の提案により2010年から教会建設が進んでいる。その資金は村人の寄付に拠っており、建設に当たっては校長自身や赴任予定の司祭が携わっており、筆者も何度か手伝いをした。

⁷もともと、基本的に神学校での教育はロシア語であり、祈祷などは教会スラヴ語が教えられている。クリヤシェン語の祈祷については、それを踏まえつつ、イリミンスキーやパヴェル長司祭が翻訳したテキストを用いて行うことになる。

⁸ロシア正教会における決まりとして、教会に入る際には、男性は脱帽し、逆に女性は布などで頭を覆わなくてはならないとされている。また十字の描き方については、右手の親指、人差し指、中指の先を合わせ、薬指と小指を曲げた状態で、額、胸、右肩、左肩の順に動かすこととされている。筆者も、一度誤って左から十字を切ってしまった際に、居合わせた女性に「お前はカトリックか？」とたしなめられたことがある。

⁹ロシア聖書協会は、1813年に時の皇帝アレクサンドル1世により設立され、人々に理解できる形の聖書を用意することを目的としている。現在では、ロシア国内の少数民族言語への聖書翻訳に力を入れており、クリヤシェン語の他に、アルタイ語、ブリヤート語、オセツト語、サハ語、チュヴァシ語、バシキール語への翻訳が手がけられている。

¹⁰ Kriashenskaia dukhovnaia missiia: sait dlia pravoslavnykh missionerov [www.missiakryashen.ru/orthodox] (2013年2月10日現在閲覧可能)。

¹¹ソ連期には、様々な習慣や行事の中で、宗教を始めとする有害な要素を取り除きつつ、社会主義のイデオロギーと合致する有益な要素を「伝統的」「民族的」として抽出することが推進された。1960年以降には、それを体系化・具現化した祝日や祭りがソヴィエト新儀礼として浸透していった。これが現在のロシア国内の様々な民族の自己表象のあり方にも強い影響を与えている(渡邊 2010: 121-144)。

[参考文献]

綾部恒雄

1994 『現代世界とエスニシティ』 弘文堂。

Baltach F.

1994 “Gordit’sia ili stydit’sia dolzhny kriasheny” Idel’. No.6. pp.61-64.

Balzer, M. M.

2010 Religion and Politics in Russia: A Reader. M.E. Shape.

Bogomilova, N.

2004 “Reflections on the Contemporary Religious ‘Revival’ Religion, Secularization, Globalization,” Religion

- in *Eastern Europe* 24/4: pp.1-10.
- ギアツ, クリフォード (鏡味治也・中林伸浩・西本陽一訳)
 2007 『現代世界を照らす光—人類学的な考察 (社会学の思想7)』 青木書店。
- Chetvertaia
 2009 *Chetvertaia tatarskaia revoliutsiia v XX veke Ch.1. Nachalo: Stenogramma 1-go s"ezda Tatarskogo obshchestvennogo tsentra (1989 g.). Insitut istorii.*
- Garrard, J & Garrard, C.
 2008 *Russian Orthodoxy Resurgent: Faith and Power in the New Russia.* Princeton University Press.
- Geraci, R.P.
 2001 *Window on the East: National and Imperial Identities in Late Tsarist Russia.* Cornell University Press.
- Johnson, J.
 2005 "Religion after Communism: Belief, Identity, and the Soviet Legacy in Russia," Johnson, J., Stepaniants, M. and Forest, B. eds. *Religion and Identity in Modern Russia: The Revival of Orthodoxy and Islam.* pp.1-25. Ashgate.
- Kondrashov, S.
 2000 *Nationalism and the Drive for Sovereignty in Tatarstan, 1988-1992: Origins and Development.* Macmillan.
- Martin, T.
 2001 *The Affirmative Action Empire: Nations and Nationalism in the Soviet Union, 1923-1939.* Cornell University Press.
- Mashanov, M.
 1875 *Religiozno-nravstvennoe sostoianie Kreshchenykh tatar Kazanskoi gubernii Mamadyshskogo uezda. Universitetskaiia tipografiia.*
- Mukhametshin, Iu.G
 1977 *Tatary-kriasheny: istoriko-etnograficheskoe issledovanie material'noi kul'tury seredina XIX – nachalo XX v. Nauka.*
- Pavel, P.
 2001 "Materialy iz istorii Kriashenskikh prikhodov Kazanskoi eparkhii Russkoi pravoslavnoi tserkvi," *Materialy nauchno-prakticheskoi konferentsii na temu "Etnicheskie i konfessional'nye traditsii kriashen: istoriia i sovremennosti.* pp.129-134. Kriashenskii prikhod g.Kazani.
- REZOLIUTSIIA
 2001 "REZOLIUTSIIA nauchno-prakticheskoi konferentsii "Etnicheskie i konfessional'nye traditsii kriashen: istoriia i sovremennost' ", sostoiavsheisia 7 dekabria 2000 goda, g.Kazani," *Materialy nauchno-prakticheskoi konferentsii na temu "Etnicheskie i konfessional'nye traditsii kriashen: istoriia i sovremennost'".* pp.183-186. Kriashenskii prikhod g. Kazani.
- 櫻間瑛
 2009 『受洗タートル』から『クリャシエン』へ：現代ロシアにおける民族復興の—様態』『スラヴ究』第56号：127-155頁。
- 塩川伸明
 2004 『民族と言語 (多民族国家ソ連の興亡1)』岩波書店。
- Vsemirnyi
 1992 *Vsemirnyi kongress tatar (pervyi sozyv) 19 iunia 1992 goda: stenograficheskii otchet. Izdatel'stvo Kabineta ministrov Tatarstana*
- 渡邊日日
 2010 『社会の探求としての民族誌：ポストソヴィエト社会主義期南シベリア、セレンガ・ブリアート人に於ける集団範疇と民族的知識の記述と解析、準拠概念に向けての試論』三元社。
- Werth, P.W.
 2000 "From 'Pagan' Muslims to 'Baptized' Communists: Religious Conversion and Ethnic Particularity in Russia's Eastern Provinces," *Comparative Studies in Society and History.* 42/3 : pp.497-523.
 2002 *At the Margins of Orthodoxy: Mission, Governance, and Confessional Politics in Russia's Volga-Kama Region, 1827-1905.* Cornell University Press.

(さくらま・あきら／在ウズベキスタン日本大使館専門調査員)